
どうやら俺は転生できるらしい。

kakaze

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうやら俺は転生できるらしい。

【Nコード】

N1890Z

【作者名】

kakaze

【あらすじ】

俺はいつもの通り過ごしていて、たまたま早く起きただけだったんだがな。いつの間にかに転生とかな…夢じゃないとありえんだが、現実だ。

初投稿で文法ごちゃごちゃです。あまり文才がないので嫌な人は来ないほうがいいです。それでもいい人は、生暖かい目で読んでいただければと思います。

いきなりの転生（前書き）

初投稿です。生暖かく見守ってもらえたら嬉しいです。
感想、アドバイスをもらえれば幸いです。

いきなりの転生

俺の名前は風霧進だ。かざきりすすむ 高校生だ。ただ、顔面が酷い。そのせいで学校でいじめを受けている。まあいつものことさ。バスで学校に通っている。現在もバス待ちだ。俺はいつもより少し早くに学校に行くこととしていた。いつもはもっと遅いが今日は早く起きてしまった。「今日も天気がいいなあ……」……バスがやっときた。何故か俺の体に……え？

……なんだここは。なんか密室っぽいが……ん？目の前によく見ると変な奴がいる。男っぽいが、何かが違うな。

???「変な奴とは失礼な……一応神だぞ？」

うわ……心読んできた……

神「当たり前だ神だもの。」

ふむ神とな……これは……転生フラグ……！

神「まあそうしてやるが……いい加減心で話すのやめろ。」

進「何故に？」

神「面倒だ」

進「……おk」

神「そっぴゃお前の名前聞いていないな。」

進「ああそっぴゃ俺の名前は風霧進だ。」

なんか厨二病っぽいとかね…いや何でもない

神「そうか…じゃあ進お前自分が死んでいるのは分かっているな？」

進「は？死んでたの？俺？夢じゃないの？」

こりゃたまげたな…

神「ハア…だから神って言うっても驚かないのか…」

進「まじか…今まで夢かと思ってふざけていたのに…」

神「まあ落ち着けその、なんだ、うん何か俺がね、人の姿でバス運転してたらさ、ハンドル操作間違えてね…正直すまんかった。」

進「…まああそこでの生活はあまり楽しくなかったからいいかな。」

いじめとかいじめとか…

神「悲しいな…とりあえず転生させてやる。」

上から目線かわらずか。なんだかなあ…

進「んでどこに？」

はっきりに言って結構気になる。

神「ん」とだな…ここなんかどうだ？」

ペラペラ…

紙使うのか。もっとテレパシーみたいなかんじかと思ったのに。どれどれ…えっと 多種族あり 魔物あり ギルドなどもあり。などなどe t c…

進「アバウトすぎないか？」

本当にe t cとしか書いてないんだよな…

神「調べんのがめんどろだったんだ」

とってもシンプル！過ぎる……

進「うゝんところで…チート能力ありか？神よ。」

ふふっオンライン小説でもよくあることだからなあ無いと困る…わけでもないがなあ…

進「ありだが…そうゆうものは普通こっちが言うんじゃないのか。」

あれ？なんかあきれてる？

進「別にいいだろどっちでも。」

神「チート能力は何にするんだ進。」

………そうだ。」

進「なんでも武器を出せるようにしてくれそ」「まて」「なんだ？」

神「能力は1つのみだ。」

チツ

進「じゃあなんでも武器をだせ………なんでも出せるようにしろ。」

神「なぜかえたし。」

進「まあいいから神のひろおおいお心で許して。」

神「そうかよ。」

進「あとさなんでも出せる能力さ、9歳まで使えなくしてくれ。」

神「…分かった。記憶を残して転生だよな。」

進「あ、あと転生した後9年間記憶封印してくれ。」

神「面倒だなあ……」

進「頼む」

神「分かったよ……」

ものわかりがいいね！

神「余計なお世話だ。」

なぜ読んだし

神「顔だ顔。」

なるほど

神「それじゃあ転生させるぞ進。来世でもがんばれよ。」

進「ああ。じゃあな。」

神「ふう…疲れた…」

神「あ、いいわ…あゝあ…送っちゃったよ…」

神の苦労は絶えない。

いきなりの転生（後書き）

あまりきつい感想などを書かれたら少しへこむかもしれません。

12月15日神が主人公が分かんと言われたので、つけました。

9年…と5日（前書き）

2話です。

あまりよく書けていませんね。がんばります…

9年…と5日

9年経った。いや、正確には9年と5日だ。ある程度このことが分かってきた。が、その前に今俺は大変な危機に遭遇している。…
…どうしてこうなったorz

- - - - - 5日前 - - - - -
- - - - -

なるほど。この町はジャロールと言い、自分はそれなりの家に住んでいるのか…

記憶が戻って良かった…あの神なんか適当だったからな…えと今は…午前10時か遅いなんてえ？あれ？文字読めないと思ったたら読めた…ああ9歳までの出来事や習ったことも憶えていたのか。理解理解。さて、自分はどんなスペックかね？

名前は、フィシー・オル・カン まあいいかなんか貴族っぽいとか貴族のようなもの。

…運動　すごく…できます…

…勉強　読み書き拔群。

…魔法　初級のライトすらできない…てか魔法あんのかよ…

これは　びみ　ようだ

魔法使いたかったorzしかもこの世界魔法の才で成績が決まるよ
うだ。なのでここではつまり貴族みたいなものの中でも落ちこぼれか
…旅に出るにはうってつけだな。早く行きてえ
うゝんまあがんばれ俺。
あとは人間関係か……

「うわっ」

つい口に出してしまった。どうやらこの体相当モテるようだ。なにせ
1日10回は告白されている。しかし、付き合った人はいないよう
だ。無口だったらしくそこを「カワイイ」などとすりよってくる
らしい。ふふっなかなかやるな…しかし振る！！みんな振る！！女
恐怖症の俺にそんなの押し付けられたらひとたまりも無い。振って
やるぜ！ みなぎってきたw

- - - - - 現在 - - - - -

「なんでよ！」

うるせえな。

「いい加減に諦めろ！」

現状を整理しよう今俺は、告白を断っている！！5日連続で…理由
はこう「どうしても付き合いたい」「運命の赤い糸よ！！」な
どなどその他頭の痛くなる言葉。夕方になり、「明日も来るよ」と
言う奴をうざったく思いながら返答をしている。こいつはユース・
ジャン・クドと言らしい。

貴族みたいなのだ。こんなのが同じ貴族みたいなものなのが嫌過ぎ
る。この世界大丈夫か？

「ねえ聞ってるの？」

「あ？」

どうやら現状整理の最中になんか言ってたみたいだ。

「今日はもう遅いから帰るけど、明日も来るからね!!」

ふう…今日も逃げ切ったか…危ないな…それにしても今日は早めに帰ったな…嫌な予感しかしねえ…

9年…と5日（後書き）

会話があまり無いので短いです。すいません。

主人公が能力を忘れてるのは、ある複線があると考えたり考えなかったり…

見てくださっている皆さんありがとうございます。

感想、アドバイスがあればどしどし受け付けます。よろしく願います。

夢の中で（前書き）

誤字、脱字がありましたら、報告してほしいです。

夢の中で

……あれ？俺あの後帰って母と父に少しばかり叱られて……そういえば何故叱られたのだ？まあいい。んで飯食って寝たはず……それなのにどうして高原にいるんだ？

「それはだん」「うわっ」「驚くことでもないだろう……」

後ろに神がいた。少しばかり驚いた。

「扱いが酷いぞ進。いや、フィシー。」

どっちかにしてほしい。

「ところで名前がフィシーなのか？」

「知らなかったのか？」

何だその顔は。

「はあ……まずフィシーが名前。オルがえくと……ミドルネームみたいなのだ。まあ実際にはお前の言うところの貴族の証みたいなのやっただ。カンはず。分かったか？」

「なるほど分かん。」

「言うだけ無駄だな。お前この夢から覚めたら引き出しにある古びた本に「起動」と言ってくれそんなかある程度のことだ詰まっているぞ。」

引き出しに入っている引き出しに入っている……よし憶えた。

「あとお前の能力少しリミッターをかけさせてもらったぞ。」

「まじか」

「そのことも本に入っているよく読めよ。」

メンドクサイなあ

「そろそろ帰る。お前現在たもててるドラ息子ってとこだぞ。しかももててるを捨ててるから本当にただのドラ息子だ。何とか体鍛えたりして魔法でも何でもできるようにしないとまずいぞ?」

「へーへー分かりましたよ。」

「じゃあな」

え? ちょ、ま……

「ふあああ」

あのやろつ相当なめんどくさがりやだな。さてと、引き出しを開けますかな。

おい…どうゆうことだ。本に向かって「起動」と言ってみたらアイ
ロッドなるものが出てきたぞ。デコレーションが酷いな。星とかい
っぱいついてやがる。とりあえず剥がすか。……

電源のつけ方俺知らなかった……orz

夢の中で（後書き）

なかなか思うように進みません。

説明……奴が来た！！（前書き）

ずいぶん長くなった気がします。

誤字があったりしましたら、報告よろしく願います。

説明……奴が来た！！

……「ヤフウウウウ！！電源はいったああ！！」

格闘すること数十分。ようやく入った。もう少しでぶっ壊すところだった。

「やっとつけたか馬鹿め。」

「アイなんちゃらのつけ方は知らん。」

てか神いつのまにいたんだ。

「アイなんちゃらって…お前言うのも嫌か」

「あとこれに説明入っているから勝手に読んで。」

「分かった。」

「それじゃあいつかまた会おう。」

「また会うことになんのかよ…」

「さよならだ。」

そう言って神は帰っていった。

あ、名前聞いてねえ。まあいいかw

「えゝ…あ、あつた。」

能力の使用制限について。

1、出せる物の1個の最大の重さは600?。

2、それ以外のこの世界の生態に悪影響を及ぼす物は出せない。

3、出した物は自身が伸ばそうと思わないと1日で消滅する。

4、生物は出せない。

最後に、能力を全開にしたい場合、神に許可をもらうことで全開にできるが、4と2は1時間で消滅する。

「ずいぶん規制かかってんな。」

「でも、このくらいじゃないとな。」

次は、世界について。

この世界の名はヴァルハード。厨二病かかってんなと思ったが無視。

ここでは、奴隷 農民 商人 下級貴族 中級貴族 上級貴族 王族
の順番で成り立っている。…らしい。なんせこの体箱入り息子（笑）
だからな。ここのことぐらいしか知らないし。学校にすら行ってないぜ。

名前は、父がファジー・オル・カン。
ファザーとか関係ないからな。

母がハミィ・オル・カン。

とっても優しい家族。

そついやそろそろ奴が来るころじゃ…

コンコン！「こんにちは」

くぁwせdrftgyh!!

き、来やがったぁぁぁぁ！！

嫌な予感がビンビンするうつつうつ！！

「はいはい」

開けるな母よ！！

「お邪魔します」

「何か無いかな何か無いかな」 ドラ○モンみたいな感じで喚いてる

「テッテレ〜じゃない！」

「透明マント！」

できた！てか本当に何でもアリだなこれ。

「あれ？いないの？なんだあ隙を見てゴニョゴニョ」

聞こえなかったが隙を作らないようにしなければ……

名案思いついた！親説得して少し修行と言つ名の家出をしよう。決まったら即行動。

実は自分の性能を確かめたいからだけど、奴は9歳のくせにしつこいからな。

なんか嫌なビジョンが見えたような…

説明……奴が来た！！（後書き）

感想やこうしたらいいなどのアドバイス等があればぜひお願いします。

12月13日 ミスがあったので修正。

15までお預けさ!! (前書き)

今日は少し調子にのって早めに投稿しました。

誤字脱字がありましたら、報告願います。

15までお預けさ！！

さて、突然だが報告することがある。俺は15歳まで旅に出られない！

つまりだ母親曰く「あなたは貴族なのよ！しかも9歳！ありえないわ！」と

父曰く「行ってもかまわんが、まだ早い。人攫いに攫われるかもしれないからな。」

だそうな。ザ・正論。それまで何してしようかね。

とりあえず散歩しよう。

「……………どうしてこうなった。」

何が起こったか、それはだな…

1、歩いていた。

2、いきなり奴が出てきた。

3、現在。

「？ 何のこと？」

「……………」

うぜえ……

こうなったら……

「え？どこ行つたの？ねえ？フィシー？」

俺の名を呼ぶな。ちなみに今は透明マントをつけている。見えないとかざまあww

「んもう！せつかく見つけたのに……」

スタスタ……

「行つたか。」

散歩は危険だ。てか何故あいつ領地に入ってきてやがるんだ？気を
つけなくては。

と言つわけで鍛錬しましよ。

「まず、どんくらい出せるかだな。」

ステロス迷彩OK。

どこもドアダメ。

M4A1ダメ。

ナイフOK。

……

何じゃこりゃ。

ああそうかどこで ドアは時空に負担が掛かり、M4A1は残弾がマガジンに入っている場合、環境破壊に繋がるからか……

少年改良中……

「できた！」

どこでも アは無理。まあ仕方ないね。後々考えよう。

M4A1は何と言うか、質量のある残像的な感じで撃って当たったから消える。しかし、質量はあるので貫いたりもできるらしい。神曰く「お前想像した物も作れるぞ想像力次第だな。」アイなんちゃらに容れとけよ。あれか、面倒か死なせたくせに上から目線？でもしも面倒臭がり屋か、畜生……
気を取り直してやっていこう。

訓練開始だ！！

ダダッダダダダカチャツカチャカチャガチャ…ダダダダダッダダ
ダ……………

これは予想外。本気出したら少しも銃口ずらさないように全速疾走
できるww

神、さっきごめん。ただこれ強すぎじゃね？

「大丈夫だ、問題ない。」

「ぼふうう」

「出てきやがった!」

「相変わらずひどい。」

「サーセンw」

「じゃがんばれよ。」

「何しに来たんだ?」

「様子見。」

「しっかり働けよ。」

「お前もな。」

帰っていったか……ふう。さて再開するか。

15までお預けさ!! (後書き)

次くらいには15歳までキングクリムゾンしたいなあ……

感想やアドバイスがあれば下さい。

15歳になって……（前書き）

やっと本編っぽいに入れます。地味に長かったw

誤字脱字がありましたら、報告お願いします。

15歳になって……

……さて、またいきなりだが15歳の誕生日を迎えた。のだが、何てことだろうか目の前には「ユザオズ」と言うまあ、なんと言うか、でつかいムカデみたいなのと対峙している。数？えゝ…約100体。すぐ終わらせるか。

M4A1を出してと…

「うおおおりやああああ」

乱射しまくる。弾数はずっとマガジンの中で作りっぱなしだ。6年やってきたからそこそ慣れている。弾はやっぱり出しっぱなしだと環境に悪いと思い、当たったとき以外は地面に着いたら消えるように想像している。俺の能力は想像力次第で強くも弱くもなれる。ミリオタ……とまではいなくてもそれなりに銃器には詳しいので想像しやすい。弾の想像も6年でなれたものだ。

「ふう…終わった。」

まあ声を出さなくてもできるが、なんかその方がいいと思う。

「さて帰るか。帰ったらもつと面倒なるかな？」

15歳。つまりそれは俺が旅立つ歳である。奴にも伝えたら「私も行く」と言いはじめたのでとりあえず15歳まで待つて、それから決めてくれと言っている。ん、話がずれたな。つまり15の誕生日は奴の決断の日。そして、両親がいろいろと用意していそうなけっこう大切な日である。

何故そんな日にでかいムカデと殺りあっていたかと言うとだな、はつきり言おう。散歩してて襲われた。それがムカデ×1。そこから仲間が来て100になった。それだけだ。まあ良い肩慣らしにはなったので良しとしよう。

そだ。あいつらに見つからないようにしないと。あいつらは数が多く、俺にとって何より対処しがたいからな…

なに言ってるか分かんと思う。少し説明する。

俺は歳をとるにつれてどんどんイケメソになっていった。自分が憎く感じた。ブサイクのほうがまだ活動しやすかったのに…でも現実とは違った。どんどん成長することに追っかけが増えてきた。この歳になるとありえないほど精密な魔法を放って確実に捕らえようとする女まででてきた。この前なんて刃物をもって真っ向から向かってきた。正直生きた心地がしなかった…

と言う訳でステルス迷彩を作る。能力も使えるようになってきたのでこつゆつのも作れるようになった。おk消えた。帰るぞ。

「ただいま」

なんと今日はあいつらがでてこなかったな。ラッキー…あ？

「「「おかえりなさいませ。」「」」

「は？え？なぜ君たちここいの？」

「「「今日は誕生会および出発会だと聞いたので。」「」」

「母よ。これはどうゆうことだ？」

「ええと…その…教えちゃった…」

「酷いや…」

Orz

「まあいいじゃないか賑やかなほうが。」
「そうかい。」

「さあレッツ・パアアアリイイイだあああ」

なぜそれを知っている。てか人格壊れたか？父よ。

そうして夜は更けていった……

そういえば奴^{ユース}来てなかったな。明日に来るよう言^{ユース}ったしな。奴は来るか？いや、最後になるかもしれんし行かないのなら、ユースと呼んでやろう。

まあ、一緒に行きたいといっても呼んでやるか。べ、別にツンデレじゃないんだからな！！なんてね。

実は女嫌いではないんだ。ただ嫌いなタイプがあるだけなんだが、それがほぼすべての女に当てはまる。まずは、金目当てで近づく女そして、地位目当ての女。俺は前世でも顔以外は少しばかりあったので、それなりに中学はモテた。俺も恋人を作った。前世での最初で最後の彼女だった。彼女はやはり金狙いだった。甘い言葉にさそわれて気が付いたらこずかいがパア。それならよかったが、高級なバッグなどをほしがった。それを断ると「じゃあ別れよう」だ。今になったらおかしいと気が付かないほうがおかしいと思える。ここまできたら分かるだろう。つまりユースが来たら、そいつの気持ちは本物だと言うことだ。そうなら俺はその気持ちを真っ向から受け止めようと思う。……ふふっ明日が楽しみだな。

そうしてフィシーは眠りについた。

15歳になって……（後書き）

なんかいい感じのような…何故このようにしたか、それはタグの恋愛が意味を成さないからです！！恋愛？は消させてもらいますよww
感想などあればお願いします。

あれ？これ、デジャヴ？（前書き）

すみません。入れたかった話なので入れさせてもらいました。

あれ？これ、デジャヴ？

「よう。久しぶりだな。」

いつぞやのー！

「いつぞやのー！じゃねえよwせっかく来てやったのに。」

「何か用事か？」

「ああ。少しばかりまずい。主に神としての立場が。」

「はあ？お前それ自業自得で自分で解決したから俺の件じゃないんじゃないのか？」

「そうなるそこなんだが、「ほかの神がその少年を助けた意味は？」とか聞いてきてな。「魔王送り込んでそれ倒せたらその罪はなかったことにしてやる。」だと。」

「つまりほかの神が送った魔王なるものを倒せと。」

「そうだ。どうか頼めないだろうか？」

「そう言われてもな…魔王だろ？」

「そうだ。こちらもやばいのでそれなりの協力はしようと思う。なにせあつちは最強クラスの魔王だからな。」

「鬼畜だなあ。」

「ずいぶん冷静だな？」

「今のままじゃ勝てないんだろ？」

「…ああ。いくらなんでも出せても体が追いつかないからな。」

「なら身体能力の底上げをしてくれ。」

「…それだけなのか？」

「ああ。」

「ふふっ良かった。もつと多くの事を突きつけてくると思ったぞ。まあ今の体じゃ無理だな。」

「どうゆうことだ？」

「お前の転生のためと能力。そして魔王が出てきたことでの世界への影響を抑えるために力を使ったからな。悪いが少し眠る必要がある。能力をやったらしばらく会えん。すまない。」

「気にするな。それで十分だ。ゆっくり休め。」

「実はいい奴だなお前。じゃあ言葉に甘えて……」

意識が消えていく中、そんな言葉が聞こえた気がした……

朝起きたら

「世界を救わなきゃいけないのかねえ」

なんてつぶやいてしまったのは仕方ないと思う。

あれ？これ、デジャヴ？（後書き）

神は眠りについたので。

すいませんただの我俣でした。

感想などあればお願いします。

旅立ち（前書き）

一回書いたのぜんぶ消えたorz

旅立ち

……準備完了。といってもほとんど何も無いけど。

コンコン

！

「こっちは終わったよー！」

「分かった。今行く。」

「それじゃ、行ってくるよ。」

「行っでらっしゃい。必ず帰ってきなさいよ。」

「おお！！行つてこい！」

ガチャ

ボタン

「よし！いくかユース！」

「え？今なんて……」

「いや、だからいくかユースって……」

「ひ、久しぶりにユースって言われた！ユースって！」

「そんなに嬉しいか？」

「だって今までお前とかだったから！」

「そうかい。」

こうゆうのも悪くはない。ユースが好意を寄せているなら、それを受け止めてやろうじゃないか。本気ならね。

「……／／／」

「ん？どうした？」

「本…当？」

「何が？その好意とか……」

「聞いていたのかてか口に出てたのか。」

「うん……」

「嘘言っても意味ないじゃないか。」

「やった……」

小さい声で聞こえなかったが、まあのは分かるだろう。

「ほら惚けてないでいくぞ！」

「あ、うん」

どうしてこうなった。

歩いて数分。盗賊さんがいた。

「おいお前。金と女置いていけ。」

……あまりにテンプレすぎて笑えない。

「うん。それ、無理。」

とりあえずナイフだ。ユースに見えないように殺る。

ザヒュ……

ブシャアアアアアア！

嘘！首落ちたぞ！！そんなに俺のナイフの切れ味が良いわけがない！

ん？そっぴやこの体勢……抱きついてね？

「はふ」

「ユース？大丈夫か？」

「よくもやつてくれたなあ」

あ、上のやつ俺じゃなく盗賊B。

どうやらどこから嗅ぎつけてきたらしい。

「野郎共！やれえ！！」

ワーワー！！

数30。何だナイフでおkジャン。

シュッ！ザッ！ザヒュ！ジャヒュ！……………

大変上手に殺りました

「うわゝグロいな」

みんな首と体が離れてる。これはグロイ。

一回場所を移すか。

「…う、うゝん」

「お、起きたか。」

「あ、フィシー」

「何故気絶したんだ？」

ユースの顔が赤くなっていく。なにがあったし。

「だってフィシーがいきなり抱きつくから……」

「それはすまんかった。」

「いやいいよ。……もつとしてくれてもブツブツ」

「おーい帰ってーい！」

「はーご、ごめん。」

「そろそろ行こう。場所は決まってるけど。」

「うん！」

旅立ち（後書き）

1 回消えたときは頭が真っ白になりました。

2 連投するものじゃないなと思いました。懲りなくやりそうですが。

もうこいつら結構仲いいな……もう結婚しろよ。

末永く幸せに爆発しろ！

感想などがあればください。

次の町は…（前書き）

アクセス5000を超えたWWWうえっうえWWW

ありがとうございますー！

次の町は…

「よくも俺の子分をやってくれたなあ…」

説明しよう！親玉が首チョンパの子分見つけ。しばらくして俺たち発見。キレル。以上。

「なんかしたつけ？ねえフィシーなんかしたの？」

「ちよつと奴の子分がやってきたんでボコボコに。」

「ふん。」

少しは驚けw

「なにぶつぶつ言ってやがる！野郎共かかれい！」

今気がついた。こいつおそらく副親分みたいな奴だったのか。親分死体があつたから自分になつたてな感じだろうな。理由？やれえだと殺せみたいな感じするけど、あいつかかれえだったし声裏返ってたから。

「あぶな！」

いきなり剣振つてくるとかありえねえ。どこの不良…て不良か。とりあえずナイフで応戦…するとも思ってたか？あ、でもユース見てるしなあ。応戦しておこつ。

ガキイン！

「小僧シネエ!!」

「だがこも」ドガアン!!

「なんぞ!?!」

そこにはすごく黒いオーラを出しながら魔法詠唱しているユースがいた。こええ…

「なにやっているのかな?怒るよ?」

怒ってるじゃん!一発の威力が高いよ!?

「ひ、怯むなあ!かからええ!!」

声裏返ってしかも、噛むっておもしろい。

「」「」「へ、へい!」「」「」

「ユース。」

「よくも私の…」

「ユース?ユーーーース!!」

「ハッ!な、何?」

「血とか肉とか見なくなったら目ふさいで!-!」

「え？う、うん。」

「よし！！ナアアイフ！アンドオオ、ナアアイフ！！」

ナイフだけじゃんかと思うだろ？片方だけ血みどろの「あの」ナイフなんだよ。盗賊を殺した、ね。

「いきがってんじゃねエエ！」

「お前がなあ！！」

スパーン！

……スパーン、スパーン、スパーン

あり？もしかして斬ると言う感情が強すぎて想像に影響したのか？ほとんどの首とんでったぞ。

まあ新しく能力の事を知れたとゆうことで。

「ひ、ひえっ……」

「た、退却！！」

逃げていく。逃がさんよ？また来るんだろ？逃がしたら。投げナイフだな。

シュ！シュ！シュ！……………ザザザシュ！

おおお！さすが身体能力底上げ！投げたいところつまり心の臓に的確にあたる！

あ、ユース忘れてた。

「気持ち悪くても良いなら目あけてもいいぞ。」

「！うん。……うつ」

「大丈夫か？吐きたいならついて来い！血の臭いが来ないところまで行くぞ！」

「わ、分かったよ……うつ……」

「よし、いくぞ！」

「そろそろいけるか？」

「うん。」

「よし、行くう。」

「どこ行くの？」

「あ。」

「まさか……」

「そのまさかさー!!」

「それはまずいよぉ……何か地図ない？」

「ちょっと待ってる。」

地図地図つと。確か……分かん。
詰んだか？やべえ！

「無いんだね？」

「はい…その通りでございます。」

「はあ…やっぱり。じゃあここから近い町に行こう？」

「どこ？」

「レバース。」

「うわ…悪徳商人が居るところかよ…」

「大丈夫だよ。あとギルド行くんでしょ？じゃあ尚更レバースだよ。」

「仕方ない。レバースに行くか…」

「うん！」

何事もなければいいのだが……

次の町は…（後書き）

ユースは魔法を使えます。主人公は少しかりが狂って…いないんですが、基本的には近距離と中距離において、格下だと思った奴に対してはナイフしか使いません。まあ、ナイフのほうが想像しやすいですね。

到着（前書き）

キャラの描写がないのは、あとでキャラ紹介をしたいと思っていて、
そのためにとっているからです。

到着

「ふう、やつとか。」

「長かったね。」

魔物出やがったりしたから仕方ないと思うぞ。俺の能力の説明もしたし。すごく驚いてて面白かった。

とゆう訳でレバースですよ！悪徳商人には会いたくない！人身売買やってるらしいし。どこで知ったかは秘密だ。別に使用人に脅しをかけたとかじゃないぞ。絶対だぞ！

「さて、どうする。」

「旅するんでしょ？冒険者ギルド行かないと。どこかのギルドに入らないと買い物できないらしいから。」

食べ物出せないのが俺の悪いところ。

「そうだな。今貴族なんて言ったら、どっかの悪徳商人に連れてかれるからな。」

奴隷としてな。

「じゃ行こう。」

着いた。見た目かい？フェアリーテオルのギルドみたいなのだ。うん、実にテンプレ。

ギイ

ガヤガヤ……

「ここが…」

中はカウンターが奥にあつて、その横にバーみたいなもの。逆に食堂みたいなもの。カウンターの近くに掲示板がある。

「とりあえず行こう。」

「登録の方ですか？」

「はい。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・・・・

・

「なるほど分かりました。」

え〜と、長かったので要約。

1、ランクがあり、GからAまで。その上にまたテンプレでSランク。

2、依頼には様々あり、期限付きは慣れてからの方がいい。

3、初めはGランク。

4、買い物が少し楽になる。

5、人権を獲得。

6、カード再発行には金がかかる。

だそうだ。

5が一番必要だ。貴族と名乗っては居られんから冒険者で隠す。

「では、この石に血を1滴落してください。その情報をもとにカードに書き込みをしますので。」

2つナイフが出された。まあ分かってたけどさ。石でかくね？岩石じゃね？1滴で足りんのか？

「つつ！」

ユースが先にやるとは。じゃあ俺も…

「ありがとうございます。では明日来てください。」

「分かりました。よろしくお願いします。」

「宿探そう。」

「えゝその前に買い物しようよ。」

「だがこゝ」「いいから！ね？」

「はい……」

とゆうことで市場。この世界の金はテンプレートに銅貨、銀貨、金貨、白金貨で構成されていて、銅貨一枚100円ほど。銀貨は1000円、金貨は1枚10万ほど。白金貨は1枚100万くらい。平民は1月金貨2枚。意外と裕福だ。場所によるけど。

「ゝ」

「どこ行くんた？食料？」

「・・・・・・・・」

「なんだその汚い物を見る目は。」

「いやあ…気持ちを知っていながら鈍感ぶりを発揮するとはねえ…」

「よく聞き取れないぞ。はっきり言えよ。」

「なんでもないよ鈍感フィシー君。」

「ど、鈍感だと…？」

「もういい！行こっ！」

「そっちは市場じゃないぞ？」

「もういいの！宿探すよ！」

「は、はい…！」

なんだろう。すごく怖い。

「いじにするか。」

質素でいいと思う。

「却下。」

「何故!?!?」

「すぐくしょい。」

「質素じゃん。」

「却下」

「はい…」

「いじにするよー」

「派手じゃないか?」

そつまるでラブ……げふんげふん。

「いじにするのー」

「分かりましたよ。ここにすりゃいいんですよ。」

なん・・・だと・・・中が質素でとてもいい所だ……

「どう？いいでしょう？」

なんだそのしてやったり顔は。

「お泊りですか？」

「はい。」

「1部屋ですか？2部屋ですか？」

「1部屋で。」

話を勝手に進めるな！2部屋だ！！

「え？あの？ちょ？」

ほら動揺しているじゃん！

「いや2部屋でいいだ」「1部屋で！」

……やめて。分かったから殺意を引つ込めて！

「分かりました。ベットはどういたしますか？」

びびっているなこの人。

「1つで。」「だが断る!!!2つだ!!!」「チッ」

こえええユースが怖いぞ?今日はなにがあつた?

「滞在ですか?」

「はい。一週間くらいは。」

「では行くときの支払いでいいです。」

「ではこちらに。」

「夕食なども料金がかかります。お風呂もありますが、高めの料金になってます。朝食もかかります。」

まあ俺にとっては気にならんことだがね。H A H A H A。作ればいいのさ!!!外道?ほめ言葉さ!

「ありがとうございます。」

「ではごゆっくり。」

「なぜ怒っているんだ？」

「なんでもない…もういいや…」

「冗談だ。これだろ？」

女性に贈り物は嫌な経験しかないが、とりあえずミスリルをベースにして、十字架をアレンジした剣みたいなたデザインを想像して作った。お気に召すかね？

「！！？」

「どうした？要らんのかな？なら戻してくるぞ。」

「いやいやいや貰います！！ください！」

「ふふっ…はいどうぞ。」

「ありがとうございます！」

「気に入ってくれたかな？」

「うん！」

「そいつはよかった。」

その頃、1匹の猫がこちらを見ていたのに2人は気が付かなかった。

到着（後書き）

ユースって名前オリジナルだと思ってたら違ったorz

感想などあればお願いします。

アイボードエ……（前書き）

いや〜……話すことないっす。

アイポォドエ……

翌日。

「おい。…おい！」
起きないな…

「まかせろ。」

「は？」

何かいる！猫っぽくて喋っている何かがいるぞ！

「いや…あの、どちら様？」

「ん？ああ、この姿だと分からないか。俺だよ俺。神様ですよ。」

「ちょwおまw寝てろしww」

「いつものお前じゃないな。」

「いつもはとりつくってるんだよ。」

「可愛いそうに…」

「なんだ？その目は…て、まあいい。何故そうなった。」

「ああ。じつは、お前の能力に枷掛けたら、その分チカラがもどつてな。この体は分身に近いぞ。ちなみに本体は二〇動見て爆笑している。」

「まじか！俺にも見せる！！」

「ちょwそこかよwくらいつくなしww」

「うつせ見たいもんは見たいんだよ。」

「これ以上チカラ使ってらんない。消える。」

「え？それじゃあ俺の能力本気出せないの？」

「いんや。この体がお前と融合すればok。」

「なる。痛くは？」

「ない。」

「いいね！！融合して二〇動見ようぜ！」

「まだ言つかww」

「ああ。言う。いくらでも。」

「そんでお前と一緒に行動しようと思うんだが、ただの猫とゆうことで扱ってほしい。」

「いいが、名前はどつする？」

悩みこむ一人と一匹。シニールだな。

「そうだな。クロでいいや。」

「どこの捨て猫w」

「まあいいだろ。猫だし。見た目。」

「そうだな。でさ、にくきゅ」断る「くそつ。」

「あれあんまり気持ち良くないんだよ。俺にとっては。」

「猫のくせに生意気だ。」

「ふああ。あ、おはよう。」

ユース起きたり。

「おうおはよう。」

「しっかりリア充してんな死ねばいいのに。」

「この顔にしたのはだれだ？」

「さあてね。」

「こ、この猫喋った!？」

「クロだ。よろしくな。」

「あ、よろしく。」

「ところでクロ。お前戦える？」

「無理ポ」

「ですよ〜」

じゃあ俺の肩で。

「自分で歩くぞ。」

「お前も心読めんの？」

「顔にでてるぞ〜。」

「サーセン。」

「そろそろギルドいこうぜ!-!」

「そうだね〜。」

準備して…あ、

「クロいたらアイパードいらねえじゃん。」

「いや、二〇動見れるように改造すれば…ぐふふ」

「おぬしも悪よのう。」

「いえいえお代官様ほどでは…」

「何してんの？」

ユースに白い目で見られた…

冒険者ギルド

「これがあなたたちのカードです。」

「ありがとうございます。」

「今日早速依頼を受けますか？」

まだいいよな。

「いえ、今日はこれで。」

「そうですか。またのおこしをお待ちしています。」

「カードの確認してねえ…」

名前フィシー・オル・カン

性別 男

魔法 G

運動 S

力 S

特殊

倉庫：いつでも600キユ（一キユ＝一キロくらい）までならなんでも出せる。

武器庫：神のチカラを借りて何でも出せるようになる。

身体能力異常：すべての身体的能力を限界突破させる。

LV1

は？LVあんの？

「なに驚いてるの？」

「なあユース。LVって何だ？」

「ん？確かその人の本当の力を示してたんじゃないっけ？」

「お前は？」

「40だよ。結構高いのかな？」

「俺1なんだが。」

「ええ！？うそお！！」

「まじだ。」

「仕方ないって。神に貰ったに過ぎないし。」

「盗賊は大体5〜7だったっけ。」

「お前らさあ。一旦宿もどらねえ？」

クロが言う。てか、分かりづらいな。

「それもそうか。一旦もどろろ。」

「クロ。」

「ん？」

「語尾変えて。」

「わかったにや。」

「切り替えはやっ！！」

アイポードエ……（後書き）

神とフィシー分かりずれえww

リアフレよ。これ以上ほかの奴に明かしたら貴様ヲブッコロス!!

能力革命。 (前書き)

遅れました。試験があります。このペースです。以上。

能力革命。

「融合!!」

ピカアアア!

何が起こったかわからんだろ。クロと融合したんだよ。あ、別にR-18展開じゃないから。フューOヨンみたいなだから。ほんとだぞ?

「成功にや。」

「すごいなこれ。」

1つの口から2つの言葉が出ているが大丈夫だ、問題ない。

「どうゆうことなの…?」

ユースさんお困りですね。

「説明しよう。クロと俺が融合!!をして、猫耳を生やし、爪が鋭くなった拳句、「能力の力が更に強くなるのにや。あと、ハイテシヨンにもなるにや。」「言葉とんないで…」「サーセンww」

ちなみに、知識共有もできるぞ。本人が許す限りでな。

「へ、へゝそうなんだ…」バタッ

「「ちょw何故倒れたしww」」

「きつと理解が追いつかなかったんだにやw」

「おkww理解したw」

「んで、能力が強くなるとは？」

「つまり、今まではお前の想像で作り出せていたのは兵器とかだろにや？」

「ああ、ただナイフだけはキチガイな強さだったが。無理ににやつて喋んなくていいぞ。」

「分かったに…分かった。ナイフはお前の気持ちが強くでていたものだ。気にスンナ。」

「なるほどな。殺すと思ったからか。すっきりした。」

「それで、能力のことだが、お前の見ていたアニメの装備なども使えるようになる。」

「ほう…たとえば？」

「そうだな…禁書の妹達の装備とか。すまん、あの野郎（神）インデックスのほうが好きみたいだ。」

「お前：自分の本体にむかってそんなこと言うなよ。ま、いい。んで、そのほかにエクスカリオンとかできんの？」

「できる。だけど、時間制限がある。30分だ。」

「この姿がか？」

「ああ、そうだ。」

「シヨボリンヌ」

「自分からでもできるが、面倒だからお前やって。ただ解除って言うだけだから。」

「解除好きだなw…解除。」

シュポ！

「え？って戻ってる。」

「こんなかんじにや。」

「おkじゃ融合！…するときは」にや「なしでお願いする。」

「分かったにや。」

「ユース殿！しっかりなされ！ユース殿…おりや！！」ガスッ

「にゃふ！」

コースがあまりにも起きないので殴ってみた。軽くだからダイシヨ
ーブ！…多分。

「なんか盗られた気がするにゃ…」

「ご、ごめん！別にそんなつもりじゃ…」

「まあまあいいじゃないか。そんなことより、ギルド行こつぜギル
ド…！」

「…！待つにゃ！」

珍しく？慌てるクロ。

「どうした？」

「魔王がこっちにきてるにゃ…！」

「はあああ…！？」

「魔王？なにそれ美味しいの？」

コースよ。こんなところで使うべきじゃないぞ。ってそうじゃなく
て…！

「何時こつち来る？」

「あと1日で来るにゃ！近くの村が消えていつているけど、まだこ
っちには来ないと思うにゃ。」

「何故だ？」

「どうやらまだ力を使いこなせてないみたいにゃ。」

「魔王強いのか？私たちの邪魔するなら殺すけど。」

「無理にゃ！！魔法は消されるにゃ！！ユースちゃんは少しばかり
引っ込んでほしいにゃ！」

「ガーン…」

ユース沈黙しました！！やばいハイテンション継続されんのか。前
世のネタがぼんぼんでる。

「今はどこにいるんだ？」

もしどこかに滞在しているのならば、一気に後ろからざっくりなん
て…

「元アスリ村にいるにゃ。どうするのにゃ？」

「なあに、少しばかりの潜入さ。」

能力革命。 (後書き)

短いですね。サーセンwえとその、次回、潜入の掟！ 見てね！

やっぱり装備は入念に！（前書き）

サーセン！ggggggです・・・はっきり言って装備確認するだけですんません。

やっぱり装備は入念に！

「なあクロ。」

「んにゃ？」

「魔王ってどんぐらい強い？」

強すぎてあっさり勝つのも嫌だし、負けたら死んでしまうからな。

「うーん…同じくらいだにゃ。全力と。」

全力ねえ…え？は？ぜ、全力か？

「MAJIDE？」

「MAJIDE!!」

「嘘ダアア！」

「どうしたんだにゃ？全力以上だせばいいじゃにゃいか。」

「あ、なるほど…ってなるかああ!!」

「見事なノリ突っ込みありがとう。でもなんとかなるって。チート並みは1個限定でしかだせないけどにゃ。」

「え？ちょ？さらつと新事実言われても…」

「がんばれい!!!にゃ。」

「なんだかなあ……」

数時間後。

「そんな装備で大丈夫かにや？」

「大丈夫だ、問題がある。お前俺の装備見てから言え。イーロックじゃねえんだよ！おもつくそアサオンだぞ？馬鹿なのか？アホなのか？死にたいのか？」

「す、すまないにや。どうやら情報伝達に間違いがあるようだにや。……オイコラ俺ゴラ！なにやってんだよ！！あ？情報圧縮したあ？当たり前には混ざるだろうが！！それでも神か？俺か？いつペン死ね！！……ごめん。少しあつちの俺に当たってきたにや。」

「ストレス溜まってんなあ………そういや、チート武器何使っている？」

「自分の好きなように。お前単独で行くんでしょ？」

「お前来ないの？」
来ないとチート武器無理じゃね？

「なんでにや？行かなきゃダメかにや？」

「取りあえず来い」

「はいはいにや。」

「あ、言い忘れてたにや。チート武器は、お前で1個、融合！で4個だにや。今あつちから連絡で伝えられたにや。」

「ナイフはチート武器か？いや、チートにできるのか。」
そうなると利便性がたかくなっていいな。

「さあそろそろいくk……離して。」
すっかり忘れ去られていたユース15歳が寂しそうにこちらを見ている。

「いくの…？」

「え？うん。まあそりや行くけど。離してくんない？」
いや、あのずっと女から離れていたんで、上目ずかいやめてください。死んでしまいます。もえj……げふん、げふん。

「じゃあ帰ったら初めての……」
魔王に戦い挑むのは、確かに死ぬことだな。しかし、初めてってなにかね？あ！あれかはじめてのチュウってやつか。そうユウコトにしよう。うん。でもあいつ男耐性あったけ？ちっさい頃から俺を追いかけていたくせに盗賊サンのとき様子おかしかったしなあ。意味分からん。

「フィシ！。DT卒乙にゃwww」

アー、アー、ナニモキコエナイ。ナニモキコエナイ。

「おkおk。」

あとで逃げよう。付き合ってもいないのにできるか！！

「さあ逝くぞ！」

装備紹介。

今回使うもの。

フィシー・オル・カン

頭・アサシンのフード（顔が見えなくなる）

腕・アサシンの手袋（壁がつかみやすくなる）

胴・ミスリルの鎧（軽くて着心地抜群！！アサシンじゃないのは気にスナナ）

足・いつもの靴（いつもの靴のほうがいいと思った。反省はしていない）

武器・ダブルアサシオブレード（よく刺さるあの暗器）、投げナイフ（どっかのメイド長なナイフではなく）、アルタールの剣（アサシン・クオードのゲーム内最強ランクの剣）

クロ

頭・モンオン3rdのアレ

胴・上と同じく

武器・なし。

「そんな装備で大丈夫かwwwwww」

「大丈夫にや。問題にやい。」

「やばくなったら？」

「融合！！するにや。」

「やっぱりねwww」

やっぱり装備は入念に！（後書き）

主人公DT損失の危機。ユースさんかなり不安です。まおーさんと戦いに行くから当たり前かw基本的に、クロとフィシーの2人？にまかせると大体不真面目になります。仕方ありません。指が勝手に動いてますし。

エルシャダイ買おうかな…

決戦（笑）（前書き）

遅れました。

決戦（笑）

ども。フィシーだ。いきなりだが逃げたい。すんごく逃げたい。な
んですか？少し遡ろう。

10分前・・・

「ここらだにや。」

「ここか。廃墟じゃないか。」

リアル世紀末な風景だ。まあコンクリとかないから魔物に襲われた
村だから少し違うが。

「魔王どこだ？」

「あそこ。」

「軒だけ普通に家が建っていた。魔王ってこんな風に町滅ぼすわけ？」

「いくぞ。」

「あい分かった。」

さて、今その家のおそらく寝室の前にいるんだ。

「カウントは？」

「5。」

「分かった。」

「5、4、3、2、1…GO!!」

ガチャ!!

「お前が転生者か…」

そこには……………

現在・・・

そこには…漢がいた。いや、ミスじゃなくて、男じゃなく漢だ。体見りや分かるつて。想像どおりムキムキな30代のおっさんが全裸でいた…おええ…吐きたい…クロも吐きそうになってる…

「答える…お前か？」

気持ち悪いな…

「ああ…そうだ。」

「ならば決着をつけよう。さあ、行くぞ…！」

「は？ちょ？まで！決着も何もないから！会って数秒だぞ？ふざけんな…！あと全裸やめろ…！」

そう叫んだあと、魔王の姿が消える。そして、目の前に来る。

「ぐふう…！」

「どうした？その程度か？」

随分なめてくれるねえ…冷静になんかなれなくなってしまっくんじゃないか？

知ったこつちやねえか。

「うるせえな。しっかり相手してやるからこいよ…！」

「ほざけ…！」

目の前に来るなんてありきたりだな！

「甘いんだよ！」

そのパンチを避けて顔面に蹴りを入れる。だが、少ししか効いてな

いみたいだな。さすが魔王。きもいけど。

「軽いな。」

足を捕まれそうになったが、なんとか回避。狭い空間での戦いはきつい。早く決着をつけないと……！！

「がはっ」

魔王の蹴りが丁度良くみぞおちに入ったか……
息ができない……

「早く立て。それとも、もう死ぬか？」

うるせえな……今の内に用意しとくか。治ったが魔王は分かってないみたいだからな。さて、困った。奴は暗器では殺せないだろうな。スピード的に見てあっちが早い。となれば……やはりクロが必要か。そっういやクロはどこだ？

聞こえてるにや。テレパシーにや。今からそっちに行く。

分かった。

「「融合……！」」

「のわっ！」

どうする？

そつだな。まず時間をとめよう。

は？何で？

あるメイド長のナイフだ。この体だとその武器の持ち主の能力の一部を使えるようになる。

俺メイド長は分かっているけどナイフは分からんからだせないぞ？

こっちで出す。

分かった。

「なんだその姿は？」

「ああ？気にすんな…どうせ死ぬんだからな。」

「ふざけているのか？」

「お前がな！」
時を止める。

静寂な時間だな。

いいから急いで殺れ！止められる時間は少ない。

！ 了解！！

「うららららあああああ」

まず、ナイフを大量展開。そのあと銃弾を開いているとこに打ち出し魔王に当てる。この時点でもうぐちゃぐちゃじゃないか？

まだだな。破片がなくなるくらいじゃないとだめじゃないか？

それはやりすぎだな。

ダメ押しに銃弾を追加。さっきより多く。

あと5秒だ。

じゃあナイフのあとに硫酸と塩酸が落ちるようにして…

「「さようなら…魔王」」

「………があ……！」

魔王は蜂の巣になった体に大量のナイフが突き刺さったあと、焼けるような痛みをもらったんだ。つーか溶けてんだ。もう生きれまい。

ああ、終わった。帰ろう。

「急いで行くぞ。」

骸を見ていてなんだが罪悪感が沸いた。何故だろうか。

「ああ。」

なんか…嫌な感じだ。

決戦（笑）（後書き）

いや、あの、その、ごめんなさい。何と云うかその…戦闘シーン苦手です。ごめんなさい。

PV10000いきました！ありがとうございます。

もうやだこの人。(前書き)

ども。かなり試験勉強で忙しかったのですが、取りあえず魔王の話を終わらせたかったのでやりました。

もうやだこの人。

クロが連絡した後、その場から立ち去って今宿に着いたのだが、ユースとの約束をすっかり忘れていたのだよ。んで、自室の前で逃げようとおもうん d…ガシイ 捕まっちゃった Z E

「何しているのかな…？まさか逃げるの？」

うは W 魔王より怖い W W クロ逃げたし W W てか俺もやばい…逃げよう！

「逃がさないよ？」

「オレハトウリスガリノオトコノコデス。ハナシテクダサイ。オネガイシマス。」

「嘘はいけないなあフィシー君？さあ部屋に戻りましょうか？」

「オレチガウダカ r うわなににするやめ…」
ボタン…ガチャ

かぎ掛けやがった！俺脱出できないじゃん！それに初めてはやばい！あと年齢的にもやばい！逃げ逃げ逃げ…

「まだ抵抗するの！？諦めなさいよ！」
怖い怖い…

「いやでも年齢とか、ね？初めてはもつと本当に好きになった人やりなさい！」

まじでやばい！何がやばいって？ユースが血走った目でこっち見て

来るんだよ！ヤンなのか？病んでいるのか？チヨウコエエエ！

「本当に好きだから言っているんだよ？」

ちよまで。冷静になれ。うん。結論出そう。え〜とこの世界では不思議なことに30まで童貞だと魔力が上がるらしい。んで俺は魔法も使いたい。しかし、今ここで、ユースにとられる。結論、魔法諦めなさい。

「はあ…分かったよ。」

食われますた。

「お楽しみだったにや？」

クロがやってきた。

「そうなるのかねえ。」

「そういえば、任務？果たしたんだろ？」

「んにや？ああ、魔王の。」

「そうだ。お前消えたりとか、帰ったりとかしないのか？」

「基本的には死ぬまでにや。まあ、寿命はお前と同じくらいだけど。」

「

なぜ？」

「いやお前能力の枷が誰だか考えれば分かるにや。」

枷はずすのクロだったな。忘れてた。

「そついやユースはどこいったにや？」

名前呼び捨てはユースが怒るぞ？4年前だかにどっか男の子が呼び捨てにして爆発したからな。

「風呂だよ。てか、この世界風呂あんのか。」

「一応。水浴びが温かくなつたくらいだけにや。」

「十分シャワーじゃんw」

「お前はいつてないのかにや？」

「ユースが来る可能性大だったんで譲った。」

「優しいねー」

「その棒読みはうれしくない。」

「当たり前。」

ん？ユースが出てきた。若干不機嫌なのは気にしない。

「入ってきて。」

「了解。」

さて、浴びてきますか。

「ふいー温かいなあ。疲れが取れる。」

それにしてもこれからどうしたものか。旅の目的は果たしたし、ク
ロがどうか行きたいわけでもなさそうだし。取りあえずランク上げ
に専念しようか。まだ最低ランクだし。

……誰かに見られているような気がするな。
「誰だ？」

気配が消えた…嫌な予感がするな。

タオルタオルっと。結局何もなかったから良かったな。取りあえず体を拭こう。

風呂場から出るとそこには…クロに殺意を向けているユースさんがいた。

「もう一度いつてみて?」

「あ、あ、あ、あの、えと、その、フィ、フィ、フィシーは、て、て、転生し、者ですう」

クロめっさびびってるwwやべ俺にヘルプもとめているよw

「あ、来たんだ。」

「え?ああ、うん。」

「助けてにやゝ…」

随分怖い目にあっただんだなw

「あ、そうだフィシー。転生者って本当?」

100%純粋な目で聞かれても本当の事しか言えないぜ?

「本当。」

「……………」

絶句。あ、今気がついた。ユースはショートカットの方がいい。

「まあ、気にスナ。」

あるえ？クロとユースが俺を見てるよ？クロはお前何故ばらす？せつかく俺ががんばったのに…見たいな顔。ユースはほんとなの？てな顔だ。

「ユースさん。もう好きにしちゃっていいにや。責任はフィシーに押し付けるにや…」

「え？ああ、分かったよ。じゃあいろんなことしようか。ね？フィシー。」

なにそれこわい。え？ちょ、まじ？ちょっとまてえなぜ俺をベッドに連れて行く！？やめて！俺の股間のライフはもう零よ！

「話すのが悪いにや！干からびろ！」

うはwクロ怖wちょいまちw後でぶつ殺すww

「今日はいいい日だね。やめようか。」

「いい日だからこそ、だよ。」

「もう知るか！！煮るなり焼くなり好きにしやがれ！！」

あ、前世合わせれば30歳童貞だ。やったね！称号では魔法使いだ！もう盗られたけど。

もうやだこの人。(後書き)

とゆうことで、イチャコラ?回でした。うぜえwwとりあえずリア
充爆発を初詣で願ってきますww良いお年を

設定資料1（これまで） 注意！読まないと分からないところあるかも（前書き）

PV約1万6000！！ユニーク3000！！！！いったい何あったんすか？絶句した後爆笑しましたwww駄文なのにありがとうございます！！

これは今までの設定です。

追記、フィシー母とフィシー父忘れてたwwまあ、しばらく出てくるとは思わんけど。

設定資料1（これまで） 注意！読まないと分からないところもあるかも

今までのキャラ、その他の設定です。薄いかも。登場人物が少ないんでww

フィシー・オル・カン

性別 男

見た目 背が高く、顔もイケメソ。 10人中9人は二度見する。
髪は黒、長さは中途半端。目は藍色である。

スペック 死後いろいろあつて、身体能力異常、想像現実。（武器庫などの総称）の能力をもつ。

現状 ユース・ジャン・クドに良い様に扱われている。干からびること間違いないし。

ユース・ジャン・クド

性別 女

見た目 フィシー・オル・カンより少し背が低い。男なら絶対に見惚れる。髪は灰色で、ロングヘア。目は黒である。

スペック じつは王国の魔術士の最高ランク並の实力を持っている。全系統の魔法が使える。

現状 フィシー・オル・カンにR - 18行きの行為を行っている。

クロ（神の分身体）

性別 オス

見た目 黒い。一目見ただけではただの猫。

スペック 融合！！をすることができる。

現状 逃走中。

魔王

性別 漢

見た目 筋肉隆々な漢。ビオー兄貴といい勝負。

スペック フィシー・オル・カンと同じくらいの身体能力だが、時間を止められてしまい死去。

現状 神々（フィシー・オル・カンを転生させた神以外）にいろいろ言われている。実は下っ端の神。これからの出番はない。

神

性別 男

見た目 エルシャ○イのルシフェルさんみたいな感じ。

スペック 武術はまったくできない。なので、主にデスクワークしかしてない。最近怠けはじめてニコ○を見はじめた。

現状 ニコ○で大爆笑中

世界 ヴァルハード

大陸名はクルージ。フィシーらがいるのはザクカル王国から少し離れたところ。

ジャロールは貴族の住宅地である。

ザクカルでは奴隷制度はないが、少し離れたところでは普通に行われている。

設定資料1（これまで）

注意！読まないと分からないところあるかも（後書き）

いや〜適当ですね〜取りあえずがんばります…

フィ「おい、想像現実って何だ？俺知らんぞ？」

作「あ、いや、え〜とですね…クロ頼んだ！」

ク「仕方ないにゃあ。よく読んで、よく寝て、次の話まで待つにゃ。

」

作「あるえ？俺、説明頼んだのになあ？」

フィ「作者、ちょっとこっち来い。」

作「はい？」

フィ「O S I O K Iだ。」

作「うわああいやだあああはなせえええ！…！」

フィ「だが断る」

作「さて、話せば分かる…うわなにするやm…」

ク「いつもありがとうにゃ〜」

依頼（前書き）

いやいや酷い目にあつた……テスト近いけど投稿！死ぬ……

依頼

さて、何だかんだであれから一週間。金が底尽きそうだ。なぜかって？どつかのおしゃれさんが持っていた。てなわけで、

「ギルド行こうぜ！」

金稼ぎ&LV上げた。1の俺はLVを上げたい。

「いいけど、何をやるの？」

うゝん…やっぱゴブリンとかになるのか？

「最初は薬草採取などにゃ。」

うおおう、クロ知ってるのか！

「薬草？」

「そにゃ。たまに危険なやつがでてくるけど。それもつと高いランクじゃね？」

「なら大丈夫かな？行こうよフィシー。」

まじか。まあゴブリンよりかはマシか。

「そうだな。じゃ、行くか。」

到着。

取りあえず受け付けだな。

「いらつしゃいませ。今日はどのような御用でしょうか。」
丁寧だなあ。いまだ！ユース！やめて！つねならないで！

「あ、ああ、えと、薬草などの採取はありますか？」
一応敬語をつかっておく。俺の流儀。

「お待ちください。」
ガサガサゴソゴソ。

「こちらになります。」

薬草の採取

場所 近隣の森

危険モンスター コシユタル

可能性 中

……危険だなゝまあいいか。

「じゃ、これで。」

「かしこまりました。」

カードに記録する。

「お気をつけて。」

終わるのはやい。

「んじゃ行くか。」

とゆう訳で森。

薬草は奥にあるらしい。ちなみにコシユタルはでっかい狼。ランク？Bだよ。Gのくせにありえんだろ？大丈夫だ。縄張りに入ってもすぐ出れば襲われない。多分。

「それにしてもじめじめしてんな」

「はやく帰ろうよ」

「だったら探すにや。」

上から俺、ユース、クロ。
湿気がありすぎで嫌だ。

「よし、行くぞ。」

ウオオオオオオオオオン！！

「あ、やべ、縄張りかここ。」

あゝじめじめしていらいらする。あ、こいつにぶつけよ。

ウオオオオオオオオオン！！！！

近いな。

「こいよ犬ところ!!」

「ウオオオウ!」

出てきたか!

「私援護する?」

「いらん!」

「死にさせええええええええええ!!」

「ウヴオウウ!」

おせえな!蹴り飛ばしてやんよ!!

「ギャウ!!」

うん、すこしすっきりした。

あ、そういや素材買い取って貰えるんだっけ?まあいいギルドにも
って行けば金貰えるだろ。

「フィシー。」

「なんぞ?」

「そいつコシユタルじゃないにや。」

「え?」

「ゴウルルルウツ!」

「そいつSランクにや。」

まじか！なぜここにいるし！殺して持ってったらどの位だろうなグ
ヘヘヘヘ。

「ガウツ！！」

うわっさっきより速い！

傷つけちゃダメだしな…あ、溺れさせよう！ナイスアイディア！

「ウォン！」

あ、また蹴ったよったく。

取りあえず、水槽！最大重量！

「ユース、やっぱ援護よろしく！水頂戴！この中に！」

「分かった！」

ふふふ…これであの犬っころを…

「ウルルルルウ…ガウツ！」

うはww来たww

蹴り飛ばして、水槽にドゥン…！

「ガババババア……」

金ゲット！

「うし！薬草とって帰るか！」

犬っころは俺が担いでいるぞ。ちなみに死んでる。

「あ、ここにいっぱいあるよ。」

「まじか。クロ持てる？」

「おkにや。」

「くわえんのな。」

「ふぬや？」

「喋んなくていい。」

金金

「うわっなんだアレ…」

「見ちゃいけません！」

視線が痛い。

さっさとギルドいこう。

「すみません、買取してもらえますか？」

あれ？不思議と受付の人が怯えているような…

「少しお、お待ちください。マスターと話してきます…」

「これかね？」

「多分そうだよ。怖いもん。」

この犬っころすごく辛そうな顔してやがるし。

「お待たせ致しました！こちらへどうぞ！」
あれ？さっきの人と違うな。

「どうしたの？フィシー？」

「ん？ああ、すまない。」

きつと休んでいるんだろうな。

依頼（後書き）

クロは決して人化しない！！多分。

王様とギルドマスター（前書き）

書いたの消えた…

王様とギルドマスター

長いな。取りあえず一分は歩いている。

「まだですか？」

「もうすこしですよ。…あ、ここです。」
コンコン

「ん？ああ、来たようだな。入りなさい。」
洪くていい声だ。じゃなくて、誰かと話していたのか？

「失礼します。」

「おお、君がムータルを仕留めたのか。」
あれムータルって言うんだ。知らなかった。

「はい。それで、買い取って欲しいのですが…」

「ん？そうか。じゃあ白銀貨6枚でどうだ？」
600万かいいだろう。

「分かりました。」

「ほれ。」

金ゲット。しばらく暮らせるな。

「済んだか？」

ん？誰だ？このおじさん。マスターは白髪が目立つが、このおじさ

んはあんまり白髪がないな。

「ん？我がことが分からないのか？」

えゝ？我って言うくらいだし偉いんだろっけど、誰だろうか？

「もしかして…国王様ですか？」

ユースさんよくご存知で。てか、俺も知っているんだろっけどこんな風な格好ではなかったと思う。

「正解だ。サッシ・バル・ユーリ。この国の国王だ。」

うん。なんだ、その、まんまだな。

「ところで、このムータルを倒したお前達に頼みたいことがある。」
うんだろっね。じゃなきゃこんなとこ来ないし。

「我の娘を救って欲しいのだ。」

「はあ…どのようなことで救ってほしいのですか？」
俺にできる範囲でな。

「病なんだが…」

なんでそうなる！！？病治す？Sランク退治と関係ある？ないだろ！！

「なぜそれを私達に？」

ナイスユース！

「フィシーと言ったか？お前の能力で何とかならぬかと思いきたのだが」

ああ…ギルドカードの…

「できますけど…」

「なに！？できるのか！城を抜け出しただけあったな！」

「今からですか？」

「ああ！今すぐ行くぞ！」

指差したさきには魔方阵。転移魔法か？国宝級だぞ！？いや、それ
だけやばいのか。

「ほら、早く行ってくれ！」
うわ、押しやがった！

「どこだここ？」

「ここは地下室だ。」
ふん。

「んで、娘さんはどこですか？」

「こつちだ。」

ここが。なかなか豪勢な部屋だな。今室内に入ったら何というか、俺の知らないいい香りがしてきた。まあこんなことはいい。

「これは…インフルエンザ？」

いや、あの、不治ではないだろ。死ぬかも知れんけどそこまで重くないっばいし。

「治るか？」

「治る以前に不治じゃありませんし、よく寝て、安静にしていれば対処できるでしょう。咳き込まないようにこれを。」
気休めだけのど飴を渡しとく。

「少しですが咳を抑えることができます。」

「おお、ありがとう…感謝する…この礼は必ずする。」
おおまじか！くれんのか！サンキュ！

「楽しみに待ってますよ。」
何かな？金？金？鐘？やっぱ最後イラネ。

「それではまた何かあれば呼んでくださいね。」
正直娘はかわいかった。ロングヘアのブロンドで綺麗な髪。顔も整っていて、お嬢様萌えの方は惹かれるだろうな。

「ああ。なにかあつたらまた呼ばせてくれ。」

王が言うことかね？呼ばせてくれって。それだけ信用されてんのかね。

「それでは。行くぞユース、クロ。」

「分かった。」

また不満げな顔なさってどうしましたか？怖いんですが。視線が。

「にゃ」

クロはなんでそうなの…：そうか。知られたらやばいもんな。

あ！薬草の依頼報告にいったのに報酬もらってねえ！明日行こう。
帰り道は…魔方阵でだろうな。

ふうついた。ギルド受付までまた歩くんだよな…はあ…

王様とギルドマスター（後書き）

一回消えてもう一回の気力がなかったなので、違う話にしました。す
んません。みじかくなったのもそのせいです。

狩り（前書き）

テスト終わった……おわた……点数おわた……もう生きてけない……

狩り

受付についた。

「報酬はこちらです。」

「どーも。」

「連続で依頼を受けますか？」
「そんなこともできるのか。」

「お願いします。」

「こちらの中からお選びください。」
「…お？」

「すみません。なんかランクがBランク相当のモンスターしかないんですが。」

ムカデもどきのもどきもいるんじゃない。やろっかな…

「カン様達のランクがムータルを倒したことでBになったんですよ。」

「あんなのがSって…今度はOOの武器のみ。とかやってみるかな。」

「一気にですか!？」

「ユースはおどろいて いる よ…疲れたやめよ。」

「何にするか…」

「ムカデもどきもどきでもいいけど、近いところがいい。…!？」

れだ!!

「ユース、これやろう。」

俺が指指したのはゴブリンの棲家の破壊。ばっかばっかやりたいのだよ。

「えー…」

「不満そうだな。この依頼だったら存分に魔法放てるぞ!」
ふふふ。これに引つかからないとは思わない。かかるだろ。

「ならいいよ!」

おやおや、目を輝かせちゃって。この子の将来どうなんだろ。魔法版マッドサイエンティストとかか?こわいこわい。

「じゃこれで。」

「承りました。」

そいじゃ行きますかね。

徒歩50分。長いような長くないような。

ようやく見つけたけど、規模は…何だこりゃ。

数は100を超えるじゃないか…だがそれがいい!!

「じゃ始めるぞ。」

「準備できたよ!」

元気いいのう。会話ではだんまりだったのに。

「クロゝ融合!」よろ。」

なに限定にすつかな。爆発させたいな…しかし…あ!

よし。前世の家にあったものであいつらを殺そう。爆発は…どうしようか。

「「それじゃレッツゴー!」」

「何時の間に…」

俺が考えてるとき。

馬鹿やってないで早く終わらせるにや。

何故?

眠い。

神 (笑) ってか?

殺すぞ?

はいはい。

「「そりゃ!」」

お前らなんかフライパンで十分じゃああああ!…!

ガッコーン!!

うん。いい音！！血みどろになるけど。

ゴオオオオオ！！

うわあぶなあつつ

「ユース！当たってる！」

あつつい！めっさあつつい！強くなってる？Sなの？ドSだったの？

「少しくらい我慢して！焼けない！」

性格変わってね？多重人格？まじか。

そういえばおしおきの時もなんかこんな感じだったよな…

「「そおい！！」」

ガコン！

「「そいや！！」」

ゴシャ！！

「「死にさせ！！」」

ドチャ！！

ふう…いい感じ！それにしても数減らないな。100以上は軽い。

「あぶないよ！！」

「んあ？」

ゴウツ！

「「ごっほごっほ…なにすんだよ！」」

少し焼けたってレベルじゃねえぞ！腕一本持っていかれそうになっ

たじゃねえか!!

「ごめん!! うわ、うわ!!」
20匹群がった…

ドガン!! うわあ… 破片飛び散った…
ん? 爆発で飛び散る…? 爆発… 家庭品… ガスか。

使っていていいか?

小規模なら。

分かった。

「ユース!! 離れてな!!」
ガスボンベはえっと… BBQ用を500個でいこう。穴あきで。

「え? やだよ。」
ええ?

「じゃ障壁はつてな。」
あぶないぞ… 多分。

「「ボンベ… GO!!」」
敵さんに 上から降らせ ガスボンベ … うまくね? 五七五だぞ?
多分。

「「マッチで着火! 爆破でぬくぬく!!」」

DDOOOON!!!

「ふはは！！ゴブリンがゴミのようだ！」「
超あつたけ。」

少しつつたよな…？

環境破壊こそ正義なり！！

てめ…あとで憶えてる言いつけてやる。

あ、それだけは勘弁。

勘弁ならねえ！

「せっかく魔法放てて調子が出てきたのに、何で一気にやっちゃうかな。」

うわ黒い黒い黒い！！

解除するぞ。

クロもコースも厳しくない！？

「さつさと依頼成功のためのものを集めるよ。」

「へいへい」

「クドさん、クドさん。今日帰ったら何しても良いって。
うわクロてめ、まじめにチクリやがったな！！」

「へ…何でも…ね。」

何とかして逃げなければ！

「なんだその獲物を見つけた時の猛獣みたいな目は。まずは怒り度がどの位かを見ないとな。」

「そうだね。すぐそこに獲物がいるんだから。」
「うわまずい！これは話を変えなければ！！」

「あ、あれをもって行けば良いんじゃないか？」

「もう回収したよ？」

「げえああああ逃げろおお！！何時の間に回収してんだあいつ！！」

「逃がさないよ」

「ハッ！捕まっているだと…」

「うわ、何するやめろ！」

「あぶねえ…もう少しで宿直行だった…」

「レポート
転移魔法」

「は？」

「もう逃がさないよ。大丈夫だって。痛くないから。」

「何ここ？いや宿だけど！転移ってどんだけ高度な魔法使えるんだ？詠唱とかどうでもいいけどレポートは気になるってそうじゃない！」

「クロ助けて。」

「俺は悪くないにや。」

神よ。お前は普段こんななのか。てか今どうしてんだろ。クロに聞こう。そうだ。そうしよう。

俺、このあと干からびなかったり、燃やされたりしてなかったら神と酒飲むんだ。未成年だけど。

狩り（後書き）

なんか一人称って難しい。てか自分の一人称がすらよく分からないものですが。

お仕置きの内容は主に、性的に吸い取る攻撃　火責め　（フィシーが受ける）

水責め　（フィシーが受ける）　電気責め　（フィシーお気に入り。もちろん受け）

です。

すみませんなんかソロになってました。狩りに直しました。

疑問解消（前書き）

本当にすいません。何かあまりにもテストで追い詰められていたらしく、おかしタイトルになってました。

疑問解消

あれ…変な幻覚が見える…神が二〇動見て爆笑している…おかしいな俺はさっきまで燃やされて、回復されて、燃やされてを繰り返して鬼め！…とか言ってたのに…取りあえず話して見るか。

「おい」

ビクツと驚いてくれたな。

「うわ！！…何でここにいるんだよ。死んだのか？」

「知るか！！てかお前いつ復活した？」

クロがいる時に聞いとけば良かったか…

「俺は魔王死んだときに復活した。あいつの存在をあの世界の住民に知らせる訳にはいかないからな。その分にまわしてたのさ。」
なるほど。

「連絡は全部寝ても入るからどれだけ寝てもいいんだが、このサイトが面白くてつい起きてしまうんだ。人類が考えることは面白いな！」

あきれた神だな。寝てても全部って事は…

「お前仕事は？」

「あるけど下のやつに頑張ってもらっている。」

「それよりさ、お前ほんとに何でここいんの？」

まじでドウユウコトナノ…

「ちょい待ち。今見てくる。」

「結果。幽体離脱。何故ここ来たかは分からない。以上!!」

「戻して。」

「ほいさつさ。」

やけに素直だな。

「動画見たいし。」

怠け神め!

「うるせ!!いくぞいいか?」

「まで!お前名前は?」

そっぴや知らんと思つて。

「俺か?そっぴやだ...名前はダメなんだ。アマテラスとでも呼んでくれ。」

「大先輩じゃねえの?」

「同僚なんだぞ!」

「ええ!!?お前どんだけ偉いの!」

「敬え。」

「だが断る。」

「最低な奴だな。」

「じゃ、送るぞ。ほい、っと。」

「うんあ?」

「やっと目が覚めた?少し心配したよ。」

どうやらあれからしばらく経ったらしい。炙られるだけの簡単なお仕事だったからいいけど。

「焦げ臭いな...」

「あゝごめん。調子がつて燃やしすぎたんだよ。」

死んだんじゃないのか!?だからあそこ行つたんじゃないのか?

「これからはやめてくれ。あつついのは嫌いだ。」

「はい、気をつけます。」

あ、これはまたやるな。

「終わったかにゃ？」

クロ？いつもこっちこないのに。

「うん、終わったよ。」

「じゃこいつと話があるから、買い物でも行ってきてくれにゃ。」
また財政破綻させるつもりか！？

「じゃいつてきまゝす。」

「それじゃ話そうか。」

「おう。」

「実はな、あのクソ神がまたお前に能力を預けたいそうなんだ。」

「いらね。だって今の時点で強いもん。」

「そこなんだよ。」

？

「つまり、お前は準最強クラスなんだよ。」

「準最強クラス？」

どうゆうことだ？

「つい先日勇者が召喚されたんだ。」

「いいじゃないか勇者。かつこいいじゃないか。爆発しろ。」

「最後はお前の今の顔じゃ言えないだろ。んで、どうやらあのクソ神の友人が悪ふざけでばれないように送ったら勇者として召喚されたい。」

「なにか悪いことがあるのか？」

「実はその勇者、もともと邪神クラスのやつだったんだよ。んで、召喚だとクソ神は気がつかないし、強さは邪神クラス。今のお前じや…「まってくれ。」

「なんで勇者を召喚する必要があるのか？魔王もいないじゃないか。」

「近所の猫に聞いたが、国王の娘の病気が治り、国王が調子にのつてこのままいい感じでいこうとなり、何かあったときのために召喚をしたらしい。」

国王うぜえな…

「そんで、奴がお前では勝てない位の力、そして勇者としての力を持ち合わせている状況で、お前が勝てるわけがない。」

「そもそも、俺が戦うこと決まってるの？」

「当たり前だ。あの勇者、お前を狙っているかのような目をしていてぞ。」

しかし、何故戦う必要がある。俺が狙われる意味がよく分からない。アマテラスに直接言えよそんなこと！！

「とゆう訳で、何欲しい？」

「電気やら何やらの自然の力を使えるようにしてくれ。」

「……大丈夫だそうだ。使えるようにしたと。やってみろ。バリリリイ！！」

「OK。」

「そいじゃ特訓でもしますかね。」
「コース帰ってきたら、だけど。」

「コースも改造するか？」

「魔力改造でおk。」

「頼んでおく。」

「早く帰ってこないかねえ。」

「恋わずらいか？」

「ちげーよ。ある意味恋人以上だけどな。」

「違いねえ。」

疑問解消（後書き）

スランプ？分からないけど、話がうまく纏まらない。

試合（前書き）

寒い…

試合

「ただいま」

やつと帰ってきたか。3時間くらいかかってまで何してんだ？

「いや、また男に囲まれてね、困ったもんだよ。」

何だそんなことか。気にするほどでもないな。

「少しくらい心配してくれてもいいんじゃない!？」

「心配する必要ないだろ。これまで何回もあったし。」

そうなんだよな。自分にとって来る男どもはぼろぼろにして、俺に纏わりつく女はごめんなさいしか言わなくなる位の仕打ちをしてたんだよな。あれ？実は守られてたのか？後で何かあげようかね。

「何くれるの!？」

「はや!! つか何故分かった!？」

顔か？顔なのか!？それとも…

「ふっふっふ…魔法だよ…」

うわ、やつぱりだよ、予想どおりだよ

てかそんなことよりも!!

「試合しようぜ!!」

「いきなりだね…」

いや、早く使いたいし。

「磯野く試合やるうぜ」

「こつちでは通じないにや。」
「いいな。日向ぼっこ」

「イソノ？ナカジマ？誰？」

あ、何か黒いのがあるな。知らないな。

「いいからさっさと行ってこいにや。」
「うお！？ま、眩しい！！！」

「ここは…どこだ？」
ただっぴろい草原だな。

「おお、来たか。」

あ、あの姿は！！

「アマテラス！？」

「ん？ああ、そうか。そう言ったんだっけ。」

「フィシーこの人がイソノ？それともナカジマ？」
まだ引きずってる…てかアマテラスって言っただろう。

「初めまして。アマテラスと言う者だ。」

「アマテラス？」

爆弾投下すんなよ…？

「かm「さ」さつさと試合すつか！！！」

さつそくですよ！！ユースは脳内処理が追いつかなくなると軽く壊れ気味になるからやめて欲しいのに！！昔それで腕折ったのに！！痛かったのに！！

「カム？なにそれ？」

「なんでもないからやるぞ！！」

「その前に、俺の用件を済まさせてくれ。」

「なんだ？」

「お前が頼んだものだ。」

ん？ああ、あれか。魔力改造か。

「それ。使えるからやってみ。」

「え？は、はい。」

ボガアアン！！

「ユース。それって？」

俺が知らないはずないんだがこんな威力の詠唱なしあったっけ？

「嘘…これ詠唱なしなのに…」

「あ、やべ、改造ってレベルじゃない。」

「アマテラスお前何した!？」

「うん。魔力だけじゃなく、攻撃力自体もがつり上げてしまった…てへぺろ。」

な・に・がてへぺろだ!!!男がやっても可愛くないぞ!!!

「そっち!？」

「別に俺は困らないもん。」

「そ、そうか。」

「ユース…やろうぜ」

「え?わ、分かった…あの何者なの?」

「すごい人。」

「そ、そう…」

「そいじゃいくぞ。…は!」

取りあえず電撃！

「フアイヤーボール！」

ちょー！ボールで潰すとか…凹むな

「じゃあこれだ…！」

氷柱でござる。語尾は特に意味なし。

「フアイヤーボール…！」

さっきより強い…！てかこっち来た…！避け…！

「あつぶね…！軽く火傷しちまったな！」

能力と繋げてみるか？できるか？

「まだだよ…！」

うわもう一個…！こうなったら…！

「食らえ！超電O砲…！」

某ビリビリ中学生からの借り物だがどうだ…？

ボフィン！

見事！貫いた…！

ドガン！

「…！？」

やべ…やりすぎた…

「大丈夫か…？」

「危ない…障壁張って良かった…」
防ぎやがった！どうゆうことだ！？」

「ふふん。全魔法対応済みだもん。簡単には破らせないよ。」
魔法じゃないんだがな」

「ならこれならどうだ！？」
感電防止用の手袋をつけて…

「エレキボール…！」
媒体は純鉄。電圧？想像に任せる。何故ならもう一個打つからだ。
2個目はスタンガンほどの威力。

バキン！

障壁は壊れた。あとは…

バチ！

作戦どおり。

「うつ？」

気絶しました〜そいじゃ起きるまで待ちますかね。

試合（後書き）

寒いです。餅は好きだけど寒いのは嫌いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1890z/>

どうやら俺は転生できるらしい。

2012年1月12日19時45分発行